

# 北海道の祭礼における「ヤマ」

—江差の姥神大神宮祭と箱館八幡宮祭の場合—

日比野 晃

はじめに

北海道の祭と云えば、伝統を伝えているアイヌの祭（例えばイオマンテ）が挙げられる。しかし、近世になって本州の各地で執行されていた曳山やその外の練物が供奉する渡御祭が、この地においても行なわれるようになった。そこで本稿では、その渡御祭に供奉した曳山がどのようなものであったのかを紹介すると同時に、その祭礼の変遷についてみたいと思う。

## 一 江差の姥神大神宮祭

一八五三年（文政五）に書き留められた「社記伝記控」<sup>(1)</sup>によると、姥神大神宮の祭神は春日大明神・天照皇太神・住吉大明神の三柱で、願主は江差氏子中・講中・問屋中である。社殿の建立初年は不詳であるが、社地は津花町浜手において一六四四年（正保一）に再建された。当社は鯨漁業の祈願社であるので松前藩主より御遷料と永久

祈禱料が出された。その後、社地周辺に人家が建て込んできたので、岩崎岳の麓に遷座し、姥神町となった。しかし社地が手狭になったので、一七七四年（安永三）に現在の所に社地替えをした。<sup>(3)</sup>当社と弁天宮の両社共同でする祭礼は、八月十四日に神輿洗い、十五日・十六日は神輿渡御で、十五日には藩主の代参があり、御旅所は北新田であった。

一八六四年（元治一）七月に姥神大神宮の神主であった藤枝主税が書いた「姥神宮夜宮例祭日記」<sup>(4)</sup>によると、一八六一年（文久一）までは祭礼を弁天宮と共同で隔年に行なってきたが、一八六二年（文久二）よりは弁天宮と分離して毎年執行されることになった。また、一八六五年（慶応一）からは、祭礼費用がこれまで問屋・大手商人の無尽講仲間である常盤講中によって大半が賄われてきたのを、「市中の供物」（町内住民の寄付）で以てすることになった。因みに、一八六四年（元治一）の夜宮例祭の初穂は次の通りである。

金五両・酒一樽・醤油一樽・餅米二俵（常盤講一統）。金二両（問屋中）。金二百疋（番人頭取・両浜中）。金二百疋（津花町連中）金百疋（新地町連中）。金五十疋・米五様・酒一樽（関川与左衛門）。



立附  
警固 隨神  
麻上下 上下子供  
手拍子老人 朱雀 御足輕老人  
御神輿 供奉十八人  
// 警固 隨神  
草履取老人 太鼓 飯禰宜式人  
手拍子老人 青龍 供奉十八人  
御足輕老人  
草履取老人

白虎 立附 麻上下  
御目見得町人衆 丁代中 警固 徒士 羽織袴  
先箱 徒士 若党老人  
氏子中 // 警固 // 徒士 先箱 徒士 大神主  
// 若党老人 杓持老人

立傘 長刀 口取老人 若党老人 羽織袴  
引馬 當番 鎗 挾箱 名主中 立附  
口取老人 // 草履取老人 警固 御祭禮奉行  
// 警固

この祭礼は、神輿渡御を中心にして「神功皇后」・「蛭子山」・「神船」・「船山」・「蓬萊山」などの曳山や練物が供奉する祭礼である。その行列に「御洗米打」・「御初穂箱」が加えられており、祭礼の時期と合わせて考えると、豊作、そして「神船」・「船山」の供奉から豊漁の感謝祭である。

曳山についてみると、一八七七年(明治一〇)には「神功山」(詰木石町)・「御神鏡山」(九艘川町)・「蛭子山」(中歌町)・「富士牧狩」(姥神町)・「楠公山」(津花町)・「船山」(茂尻町)・「榊山」(山之上町)が供奉している。<sup>(6)</sup>

そして今日においては「恵比須山」(大潤)・「新栄山」(新栄町)・「神功山」(愛宕町)・「豊栄山」(豊川町)・「蛭子山」(中歌町)・「豊年山」(姥神町)・「楠公山」(津花町)・「松宝丸」(海岸町・陣屋町)・「義公山」(柏町・南浜町)・「誉山」(茂尻町)・「聖武山」(橋本町)・「源氏山」(上野町)・「清正山」(本町)の十三台が供奉している。

(時代における、曳山とそれを所持・運行する町名および曳山の名称の変化は、行政単位の変更と曳山が搭載する人形の変更によるものである)

現在の十三台のうち「松宝丸」のみが船型で、他の十二台は一層構造の屋台の曳山である。この曳山の台上には、恵比須・武田信玄・神功皇后・瓊瓊杵尊・神武天皇・楠正成・徳川光圀・大石良雄・日本武尊・弁慶・加藤清正などの人形が、神の依代としての椀松など



蛭子山 (中歌町)



の青木（これを江差では「ヤマ」と呼ぶ）と共に据え付けられている。この台下は、笛・大太鼓・小太鼓・銅鉦で祇園囃子の流れをくむ囃子を奏でる、囃子方の控え場になっている。（写真参照）

祭礼に曳山が供奉するようになった始期は明確でないが、「神功山」の人形（神功皇后）と水引幕が一七六一年（宝暦一一）に京都で製作されており、「蛭子山」・「豊年山」の水引幕が一七八一年（天明一）に同じく京都で製作されていることから、遅くとも一八世紀



神功山（愛宕町）

中葉から徐々に始まったであろう。

江差の人々は曳山のことを「ヤマ」と呼んできた。そして、曳山が自分の町内から出ていくのを「行き山」、神社の前や寄付を多く出した家などの前では「立山」、神社から自分の町内へ帰ってくる時を「帰り山」と云って、囃子を変えて太鼓を叩く。また、曳山の台の上に神の依代として青木を立てることを「ヤマを立てる」と云う。

次に、曳山の構造をみてみよう。



祇園祭の観音山  
（『京名所図絵と祇園祭山鉦』所収）

右図は一七五七年（宝暦七）刊の『祇園御霊会細記』にもとづいて大正年間に田中緑紅が複版して刊行した『京都祇園会・古代山鉦図譜』中の「観音山」の版画である。

これは「神功山」の人形や水引幕が京都で製作されたと同時期の

祇園祭の一つの「山」であるが、江差の現在の曳山によく似ている。一層構造の台上には依代の松と人形（観音像）が安置されて、一層には水引幕が張られている。松はかなり大きいものが立てられているが、江差の場合も二〇世紀になって町内に電灯線が引かれるようになってから、依代の椴松が高くては巡行できないので小さくしたようで、それまでは大きいものであった。尤も、一八世紀中葉の江差の曳山がどのような構造であったのかは、絵画史料が残されていないので明確でないが、依代の青木に人形を配する基本的な形態を考えるなら、曳山の構造の大きな変化はなかったであろう。

このように、曳山の呼称・形態・構造、人形・囃子などをみると、江差の曳山は京都の祇園祭に曳行される山鉦の「山」の、場所を隔てて再生産された「ヤマ」である。

## 二 箱館八幡宮祭

一九世紀中葉に市川十郎が著わした『蝦夷実地検査録』<sup>(7)</sup>によると、箱館八幡宮は慶安年中（一六四八―一六五二年）に巫子伊知女と云う者によって創祀されたと伝えられ、一七一五年（正徳五）神職菊池惣大夫の時に再営された。そして一八〇四年（文化一）に、箱館奉行所が社地のあった所に置かれることになったので、造営資金百両が支給されて会所町へ遷宮し、毎年米二十俵が神職に与えられた。初代の箱館奉行戸川安論が、「国家が強く、北辺が安寧であること」を願って奉納した額が拝殿にあった。

祭神について、この『蝦夷実地検査録』は誉田別尊（応神天皇）のみを挙げているが、一八七二年（明治五）に記された菊池重賢の『巡回日記』<sup>(9)</sup>では八幡大神（応神天皇）の他に合祀として住吉大神・金刀比羅大神・諏訪大神・田村神となっている。そして一九二二年（大正一一）に函館八幡宮社務所が発行した『国幣中社函館八幡宮記要』<sup>(10)</sup>では、品陀和気命（応神天皇）を主神とし、住吉大神・金刀比羅大神を相殿神としている。

一八五八年（安政五）に箱館八幡宮神主は「天下泰平、国家安穩・五穀豊穰・四夷懾伏・漁業充満・船々海上安全」を祈願する社殿造営の土地を箱館奉行所に願いで、石狩八幡社を造立した。次いで、小樽住吉神社も造営し、室蘭八幡神社にも神体を移した。<sup>(11)</sup>

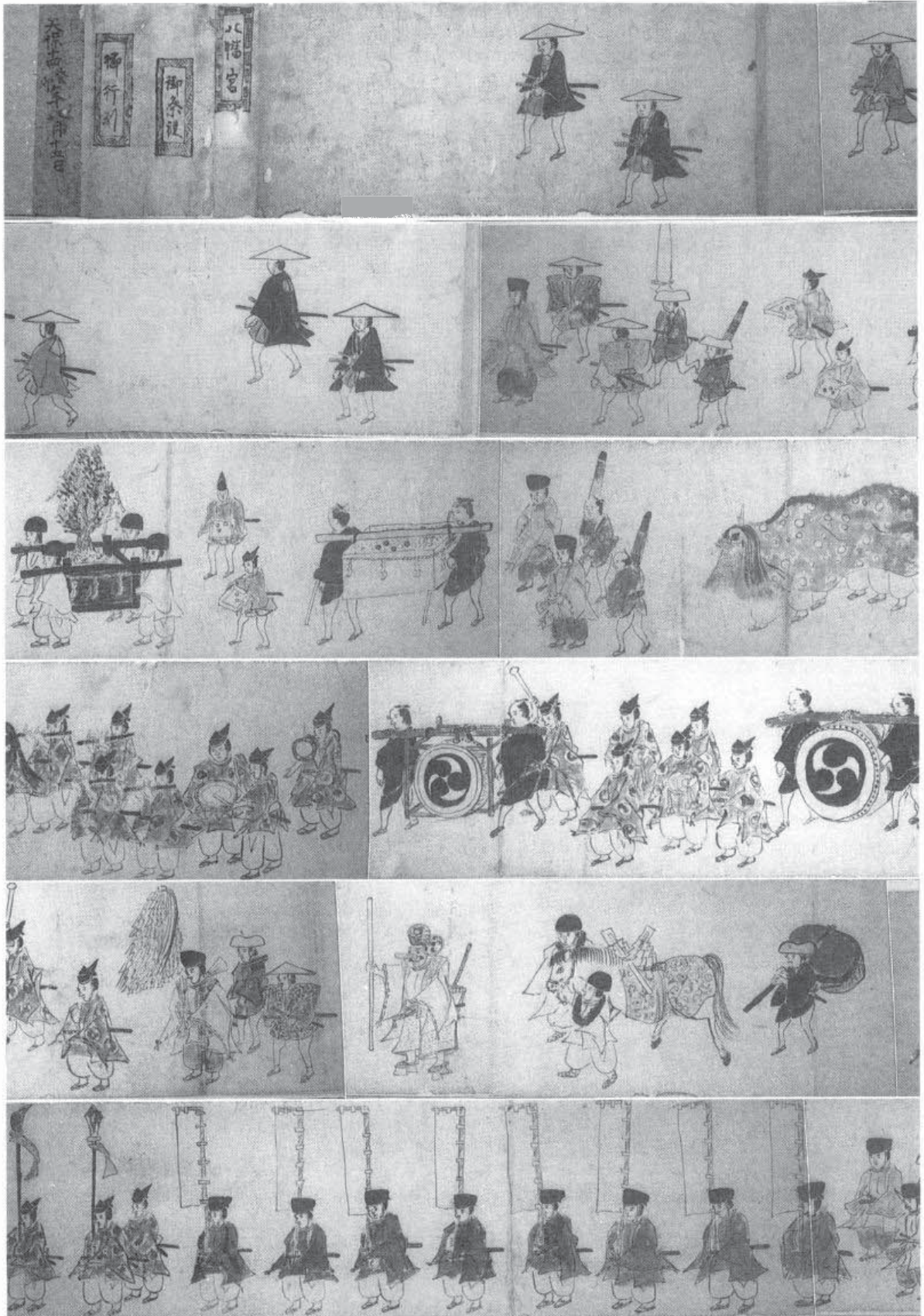
一八七一年（明治四）には開拓使より崇敬社の社号を付与され、その六年後に国幣小社になった。一八七八・九年（明治一一・一二）二度の類焼に遭い、その翌年に谷地頭へ官費で造営されて遷宮した。そして、一八九六年（明治二九）には国幣中社となった。<sup>(12)</sup>

前掲『国幣中社函館八幡宮起要』によると、渡御祭は一七八〇年（安永九）八月に始められ、以来凶荒の年以外は隔年に行なわれたが、その一六年后に箱館奉行新井田文治兵衛が祭礼を盛大にするために発起し、旧式を改めて祭礼定書が決められた。それによれば、周辺六ヶ村より祭礼費として戸別に昆布や鱈を供出させ、供奉の人も各村に割り付けたと云う。

そして、「文政年間より町々に飭山など出現」とあるが、この「文政年間より」については次の絵巻を見ると疑問である。



八幡宮御祭礼御行列絵巻 (市立函館博物館所蔵)

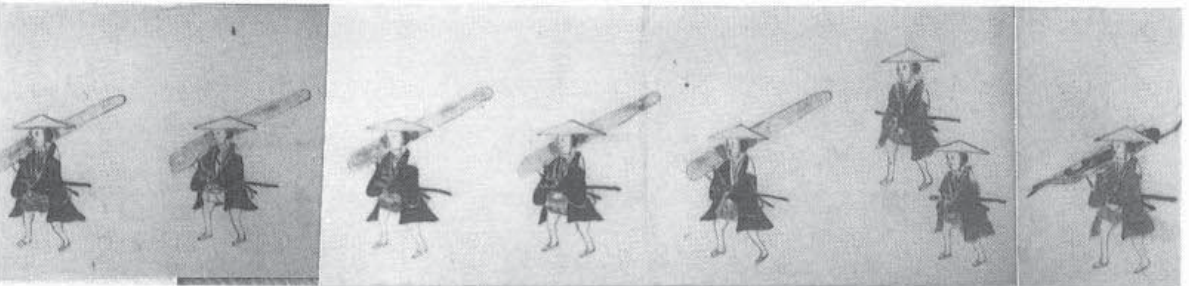
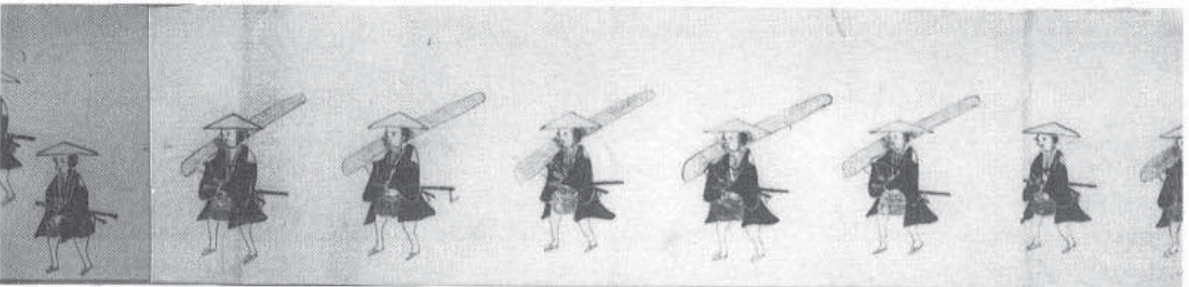
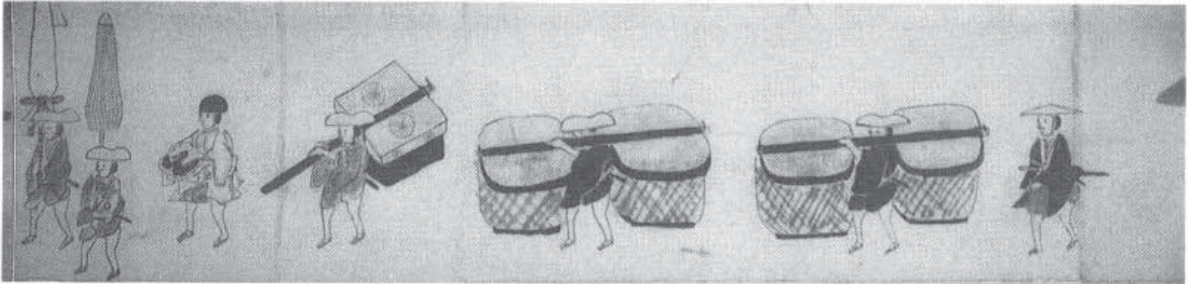
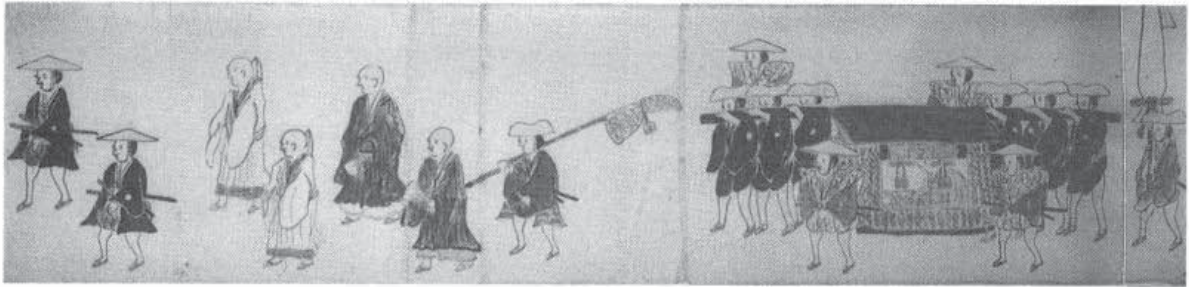




日比野 晃：北海道の祭礼における「ヤマ」

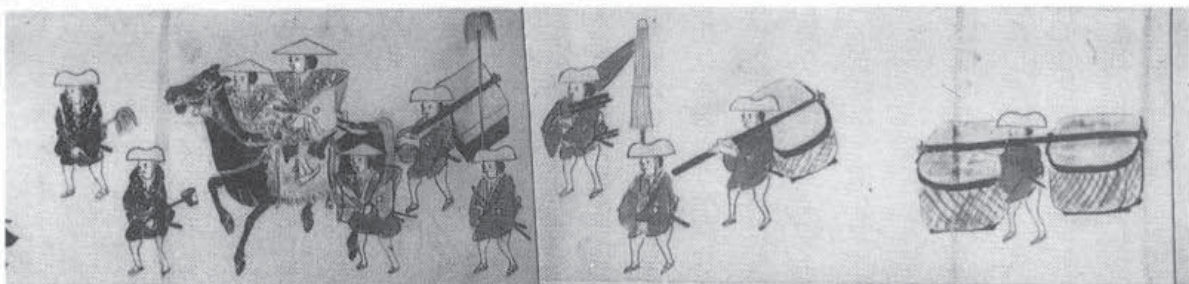
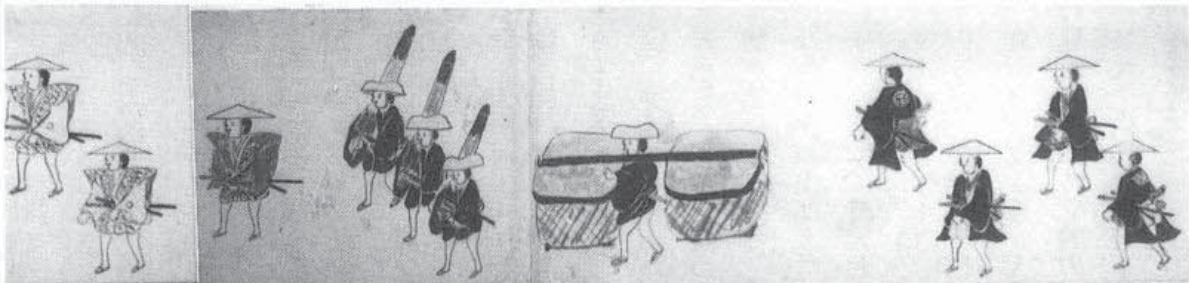
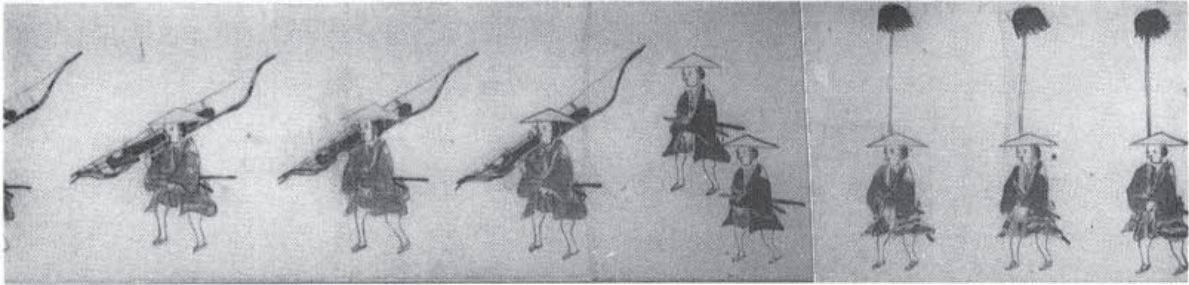
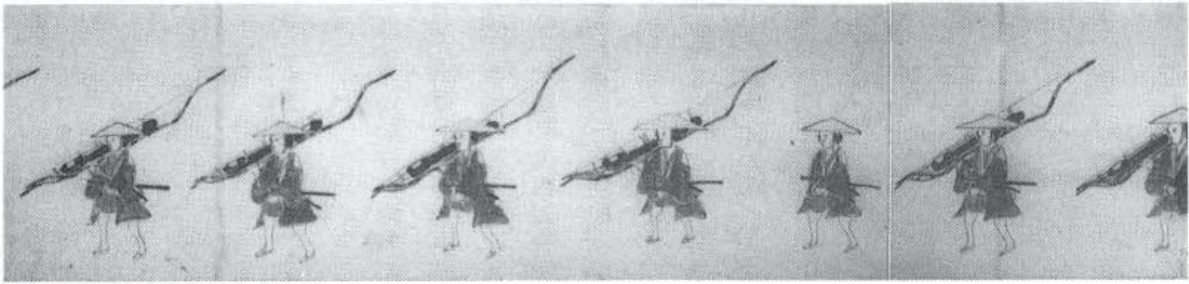








日比野 晃：北海道の祭礼における「ヤマ」



この「八幡宮御祭礼御行列絵巻」は一八四三年（天保一四）八月一日の、総勢二八六人による神輿を中心とした渡御を描いたものであるが、これには「飭山」が供奉していない。

一八五四年（安政一）に箱館奉行が再置され、その施政執行の参考に資するため、町役人に民政状況等の報告をさせた。その報告書である『箱館風俗書』<sup>(10)</sup>には、八月一日の風俗を次のように記している。

「当所鎮守八幡宮祭礼に付、市在杜家中相集り、市中神輿渡御祭日。八幡社より行列繰出し、夫より御役所御門前において御祈禱相濟、坂通り相下り町年寄銘々宅前において御祈禱仕候。夫より弁天町・地藏町神輿御旅所において神楽御祈禱執行仕候に付、町年寄・祭礼奉行・名主御祈禱相濟候迄参詣仕来りに御座候。依之惣町四組に相成り、祭山と相唱ひ、弁天町・大町・内澗町・山之上町。船山・大黒山・蛭子山、前日より八幡社内へ飭り置、当日神輿渡御の節、行列の跡に相成、山々え囃子方付、曳歩行申候。其節市在共見物群集仕候間、町方足軽中大勢警固被「申付」付添へに御座候」

また、『函館月次風俗書補拾』<sup>(11)</sup>では次のように記している。

「祭礼の行装は、長柄数十本、弓数十張、鉄炮数十丁、其他挟み箱其他何々等数百人の先供、之を奴と唱ふ。此奴の足並揃ひとて数日前より演習するとかや。次に黒羽織大小の徒士数十名、袴着用者数十名（此袴着用は皆一家の主じ也）、神官数十名（在々の神官悉く来函）、神輿の前後は太鼓琴々、笛唳々、数百千の行装頗る静粛也。最後壺丁計りを隔てて船山・蛭子山等次第に列続。此日祭礼惣奉行

として町年寄の内壺名巖然として行列の迹を守る」内澗町より出する船山は鳳凰頭の屋形船にて、船身朱或は他の彩漆を以て之を塗り、彼の錦絵に見る処の鳳凰頭屋形船を眼前に見るが如く、長さ五、六間、巾式間半位。船飾りの彫刻は悉く金銀を鏤め、猩々緋の帆は風を孕んで勇ましく、紫縮緬の幕は屋形を包みて奥床し。其のうへに朱羅紗へ金糸銀糸を以て龍虎の縫模様ある半幕を張廻し（是を水引といふ）艫の方にも同様の羅紗、或は天鷲絨に金糸銀糸惣縫の艫かくしを下げかけたり。七ツ道具は整々として舷に押立、五色の吹流しは翻翻として浜風に飄り、柱のうへには金の千なり瓢を輝かせり。櫓の上には神功皇后の御像に武内宿禰の大人形を飾り立て、三韓凱旋の有様を擬するにやあらん。実に善美を尽せし船山にぞある。さもこそあらめ物価最低の時節に有つて猶千有余金を費せしといふ。弁天町の船山は鳳凰頭にはあらざるも船体の結構、飾具彫刻の彩色等、大略内澗の船山に彷彿たり。帆柱の下には蛭子鯛を擁して悠々然たるを見る。山の上町・大黒町は船にあらずして何れも方形なり。大黒山は大黒を飾り、蛭子山は蛭子を飾り、何れも囃子方は揃の衣装にて笛・太鼓・三味線・摺り金・鼓弓等面白く囃し立て、わけて大黒山は女兒の（多くは遊女屋兒女、芸妓輩の兒女等）手踊りあり。故に此一ト山は他の行列に後れて優々町内を躍り行く也。此山々を曳き行く人数夥しく、得て算ふべからず。此他、年により他町より臨時急製の祭り山を曳き出行事もあるなり。（但し、八幡社祭礼先供の奴は、下モ在より来る也。下モ在とは銭龜沢・志のり・小安等の諸村落也）」



『箱館風俗書』では「祭山」を「神輿渡御の節、行列の跡に相成、山々え離子方付、曳歩行申候」とあり、『函館月次風俗書補拾』では行列の「最後壺丁計りを隔てて船山・蛭子山等次第に列続」とあるから、神輿を中心とした渡御行列と曳山の曳行は分離して行なわれたのかも知れない。そうであれば、「八幡宮御祭礼御行列絵巻」に、当時曳山が供奉していたにもかかわらず、曳山が描かれていないこともあり得ることである。しかし、これだけ豪華な曳山を祭礼行列から除外して描かないことはあり得るだろうか。

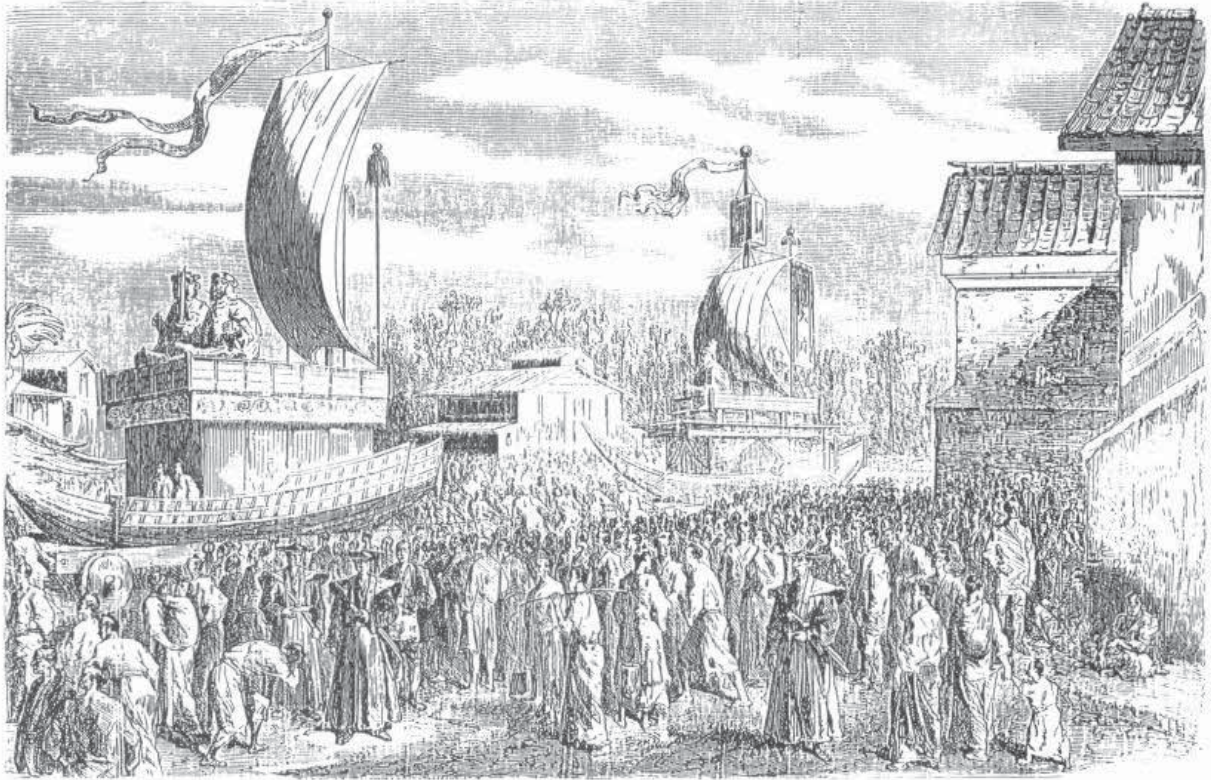
いずれにしても、曳山は一八五五年（安政二）には曳行されておらず、それは ILLUSTRATION JOURNAL UNIVERSEL (以下、「イリュストラシオン」紙と記す) に掲載された一八五七年六月二〇日号の記事とデッサンによってわかる。この記事とデッサンは一八五五年（安政二）九月二八日（当時の旧暦では八月一八日）から三日間行なわれた祭礼を取材し、九月三〇日（旧暦の八月二〇日）付で箱館からフランスのパリへ発信されたものである。

祭礼日は『国幣中社函館八幡宮紀要』によると、「八月一四日宵宮祭を、一五日午前に大祭を、午後に夕祭を、一六、七日の両日神輿渡御祭を、一七日に直会祭を執行す。（但し渡御祭三ヶ日に亘るときは一五日の午後より発輿せらるゝものとす）」となっている。しかし、箱館港に出入りする外国船の状況等を日記風に記した尾山屋の覚え書『大宝恵』<sup>(7)</sup>をみると、一八五七年（安政四）八月二三日の項に「右船出帆。其日ヨリ八マン宮御祭礼。山船出、廿五日迄終毎日御天氣」とあり、祭礼は毎年八月一五日に執行されたとは限らない。

「イリュストラシオン」紙に掲載された記事から、記者には「キリスト教の名残りや私達の守護聖人の祝祭日の真似のように見た」当日の祭礼内容を概観してみよう。<sup>(8)</sup>

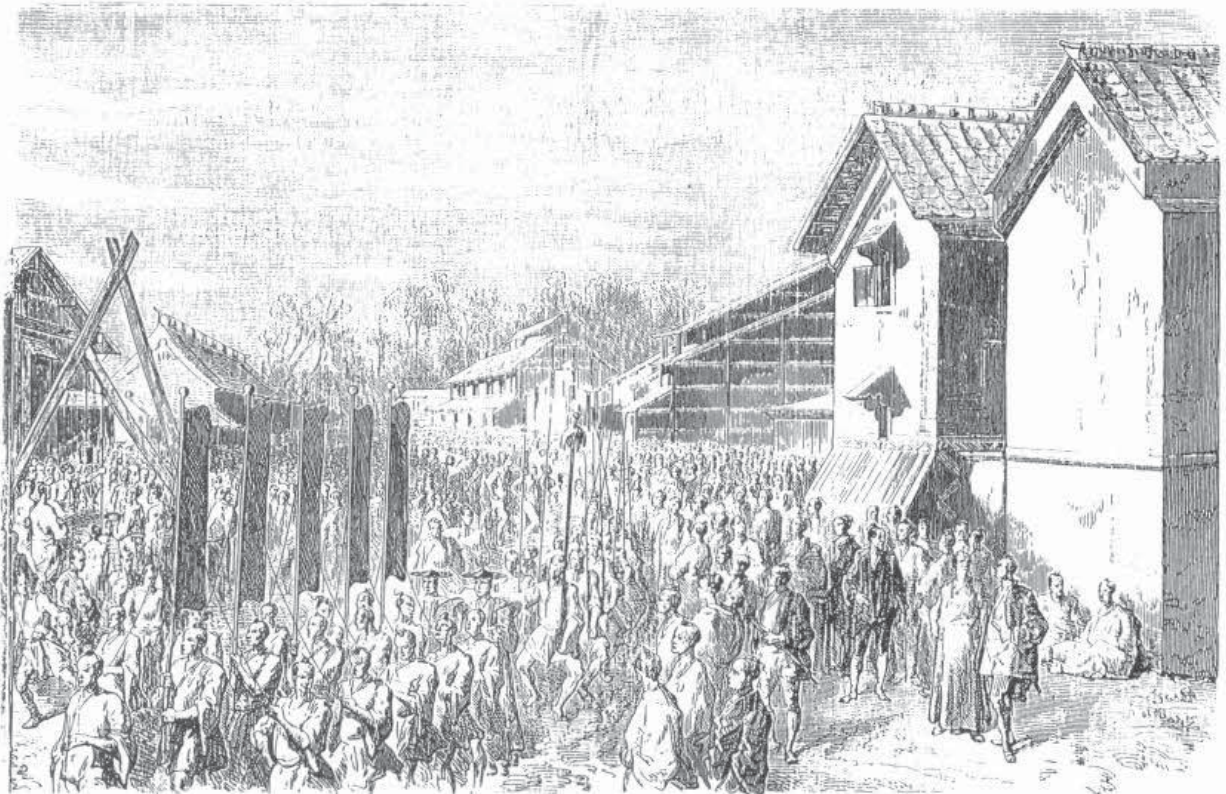
「行進は、祭壇で儀式を行うカトリック司祭の衣装に細部において大変よく似ている礼服を着た六人の名士（町役人）の一人によって始まる。それらの人々の、彫刻をほどこした丸いにぎりの長い杖に片手でよりかかり、もう片方の手で扇をあおいでいる、重々しい態度は彼等に与えられた役割がかなり重要であることを示している。数歩後ろには、青い上着を羽織り赤い布を首からぶらさげたおよそ五〇人の男達が二列になって進み、長さが一五ピエはある竿の端には、青や白や赤の横断幕または神の功德を紙の上に宣言した一〇ピエほどの品のいい書き込み、そして最後にはその場にふさわしい書き込みや象徴的な図柄で覆われた日本風の提灯を持っている。その最初の集団の後ろには、しかめ面や跳ね回ることや衣装から悪の神の擬人化のように思われる道化役者が現れる」それから行列をつくってやって来たのは、それぞれが職業のシンボルを持ったあらゆる職業の代表者達である。それは鍛冶屋から、片手にはバケツ、もう片手には絨細に漆を塗った木で出来た小さい樽を持った牛乳屋に至るまでである。私達の宗教的な行列を飾る人々がそうであるように、贅沢に着飾った男女の子供たちがこの職人のグループに混ざっていた「やがて派手な馬具に飾られた馬に乗り、そして神妙なお供に取り巻かれた高貴な神官が現れた。彼の前には四人名士が歩き、そして小旗やろうそく・提灯や御神体を持った人々が左右二列





日本の守護神の祭りの行列

(「イリュストラシオン」紙)

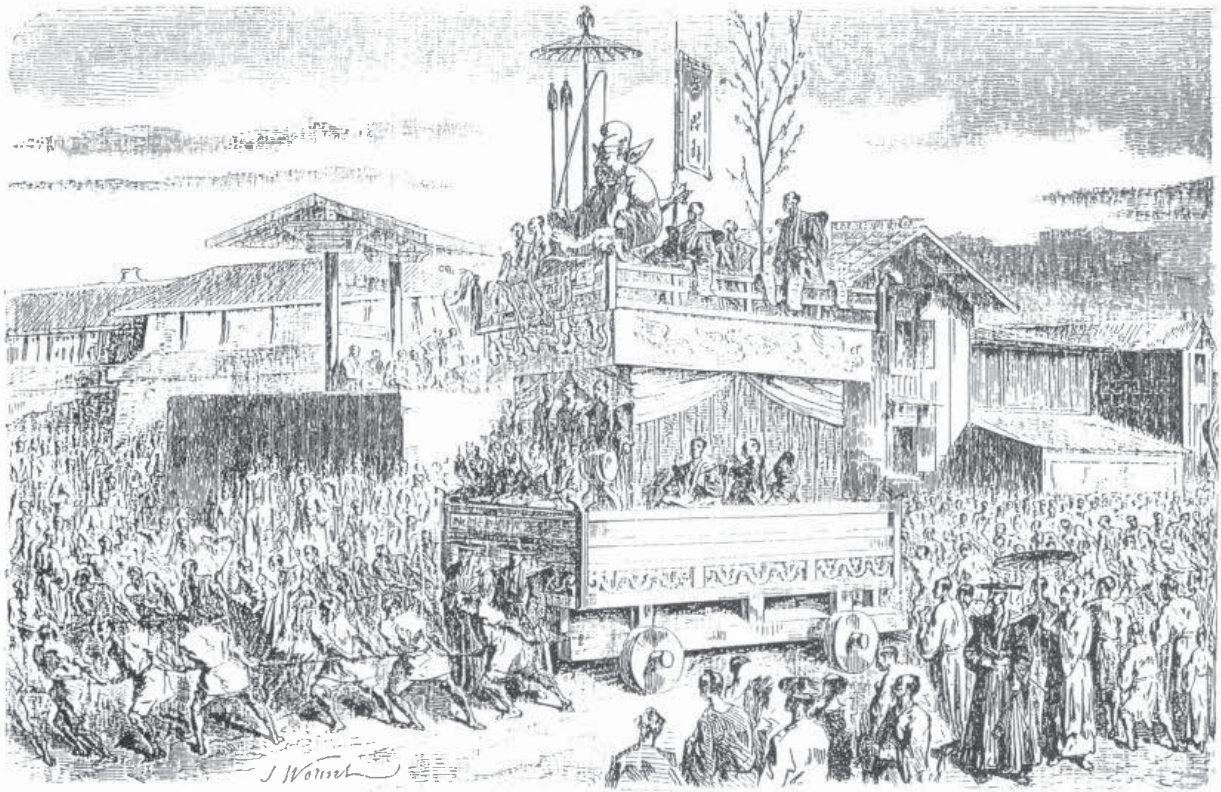


日本の守護神の祭りの行列—Worm 氏のデッサン、ド・モトラヴェル氏のクロッキーより

(「イリュストラシオン」紙)



日比野 晃：北海道の祭礼における「ヤマ」





になって歩いていった。神官の衣装は、白い祭服とストラをまとい、頭に黒いクレープ地の四角い帽子をかぶったポルトガルの司祭のものと同じであった。「軍隊は、特に三つのタイプによって表現されていた。槍を持った人と銃を持った人と弓を持った人達は、二列に並んで、戦士の歩き方というよりは曲芸師の歩みに似た奇妙な歩き方をしていた」「この軍隊の見世物に続いて、名士の一団が歩いていった」「この退屈したグループの後ろには、二〇人程の人々によって持ち上げられた、素晴らしい彫刻をほとこし繊細に漆と金箔を塗った〈駕籠〉というか〈輿〉が現れ、よろよろと引張られて来た。胴体の壁面は、房状になって吊り下がる金色の金属で出来た沢山の飾り物で飾られていた」「私達が次々と続いて行進して行くのを見たばかりの様々なグループは、太った牛の先を行くお面をつけたグループを見た見物人を引き付けるためにあてられた脇役でしかない。やつのことで、そのグループらは、小旗を飾った四台の大きな荷車が見物人の所まで到着するのを見たくてうずうずする見物人の視線を、しばらくの間固定させることができた。その荷車は、守護聖人を象徴する像を運んでいる。それは、おのおの一〇〇人ぐらいのがつしりした男に引かれて、奉行所の広場に達する険しい並木道を粘り強く登っていった」「直径わずか七〇センチメートルで厚さが一五〜二〇センチメートルの円い四つの車輪の上に置かれた最初の山車が二本の引き綱に沿って並び、かけ声をだし励ましあっている一〇〇人の力強そうな男達によって引かれ進んでいる」「頑丈な骨組みによって集められた四つの車輪が、幅四メートル長さ五メートルの

台車を支えている。その台車は、赤い漆を塗った木製の手すりに囲まれ、絵と豪華な金箔で飾られている。この台車の中央には、素晴らしい技術を駆使した建造物が建っていて、それは醜く不恰好な太った起き上がりこぼしを連想する「Hoskandan」という神の巨大な像なのであるが、その台座としてこの五〇センチメートルの手すりが役立っている。その像は右手に釣竿、左手に巨大な魚を持っている。それらは、その地域の必需品と富の基盤の御利益を象徴しているのだ。下側の台の前方には、六人の子供たちが豪華に着飾り、翼を広げた天使たちの格好をして、彼らの前に置かれた太鼓で目立つ拍子をとりながら「Hoskandan」をたたえる歌を歌っている。像を支えている建物の内部では、楽師達が日本のギターやフルートの音で子供達の歌の伴奏をしている。高級な絹の幕や純金で刺繍した鶴をちりばめた布や金箔を塗った彫刻の途方もない豪華さが、その山車がほとんど覆われている最も上質な漆をひきたたせ、この山車を目に見えるものの中で最も豪華で最も興味深いものの一つとしていて、二台目と三台目の山車は、それぞれ小型の帆船をかたどっていて、一台目の山車に何ら劣る所もない。二台目の山車は、八幡様と呼ばれ、最初の山車のそのように置かれた下側の建物の上に高貴な衣装をまとった海の神とその妻の像を乗せている。翼を広げた素晴らしい出来ばえの黄金の巨大な龍が、この帆船の前を飾っていた。三台目の山車は、二台目に似たような別の航海の神であり、恵比寿という名を持った像を乗せている。四台目の山車は、その形はほとんど最初の山車の形であり、もし私の通訳の Chassiro が大い



に私の気持ちがかかったとすれば、農業の守護神の像を乗せていた。

また、その神は、みじめな着物を着て、起き上がりこぼしによって表され、巨大な布袋を背中に背負って、どららかといえ、乞食の神のような様子をしていた。最後の山車は、それまでの山車とは異なっていた。というのは、それまでの山車の上で神々の賛辞を歌っていた若い少年や音楽家達が、ここでは若い娘達のグループによって取って変わられていたのである。宗教的な思索というより観客に媚をうるように気をつかっていた。一見したところ、若い娘達の方が農業の神よりもむしろずっと本当の神に仕えているように、私には見えた。「これらの大きな山車が進んでいるペースは、行列が奉行所から町の東のはずれに行くためには最初の一日いっばい必要であり、立ち止まったのは日暮れ時であった」。「二日目と三日目には、行列は一日目と同じ順序で行進したが、町の主要な地区にさしかかると更に速度を落とし、たっぷりの御神酒によって息を吹き替えさせるために頻繁な休息をとった」<sup>(19)</sup>

この「イリュストラシオン」紙に書かれた祭礼行列を、「八幡宮御祭礼御行列絵巻」や『函館月次風俗書補拾』に記されたそれと照合してみると、内容・順序等に差異がある。したがって祭礼の様式は厳格なものでなく、年によって変化していたことがわかる。

一八六八年（明治一）から翌年にかけての箱館戦争によって、祭礼の曳山は焼失して、その後に再造されることなく、現在は市立函館博物館に「神功皇后三韓攻船山」に搭載していた神功皇后と武内宿禰の人形の頭部のみが保管されている。

## おわりに

江差港は、一七世紀後半には本州の木造建築の需要に因って、翌檜材の積み出し港として活発化し、その後、練の需要拡大によって最盛期を迎えた。即ち、北海道から日本海を南下して下関経由で大坂に至るいわゆる北前船によって北海道の産物が本州へ、また、本州の米穀・調味料・酒・衣料・雑貨等が北海道へ運ばれた。それは単に物資の交易のみでなく、関西地方の宗教・文化・風物等を北海道にもたらした。その一つに姥神大神宮・箱館八幡宮に祭神として祀られた住吉大神<sup>(20)</sup>がある。船の航行は海難事故の危険にさらされるが故に、航海の守護神として信仰されていたこの神を大坂から勧請した。そして、その神社の祭礼に京都の祇園祭の「山」を供奉させた。箱館の「山」は江差のそれより起源が遅く、江差の「山」に触発されて始まったかも知れないが、いずれにしてもその元は京都である。

松前藩政期には、江差の間屋株仲間は一三軒あり、江差商人の北前船経営者も多くて、幅広い経済力を背景にして上方の文化が移植された。移植と云っても、それはその土地の風土・条件に合わせての受容であり、再生産されたものである。海外に開港した箱館の八幡宮祭礼が「乱痴気騒ぎ」の現象を呈していたのもその表れである。ところで、曳山供奉の祭礼が今日においても江差では盛大に引き継がれているのに、函館では消滅してしまったのは何故であろう。

これについて、宮下正司氏はその著『江差風土記』の中で次のように述べられている。

「函館からのヤマの消滅は、未曾有の劫火による焼失がその主因ではないかと推察されるのであるが、明治期までの江差も火災発生の頻度は高かった。(中略)若し江差でヤマが焼失という不幸に遭遇したとしても、間違ひなく復興再建して、仕来りを守りぬくであろうと確信する。それが江差の特殊性・江差の風土である。」そして、江差の「神輿の渡御に供奉するヤマも、元治元年までは、大手商人によって建造され、地域の住民に公開して供奉曳き廻したもので、一切の保存管理・供奉経費・飲食・直会の費用に至るまで、勧進元にあたる大手商人の支出」であったのが「町代中の経費負担に移行したように、ヤマの所有、保存管理、供奉の経費負担が、地域住民へと変るのであるが、それは明治三十年(一八九七)から漸次始まり、大正初年には総べての所有者(大手商人)から、町内の共同所有として寄付するという方法でなされる」ヤマ飾りの基本や神輿の供奉という形態を伝承しながら、参加態度を改造し、民衆の参加する祭り、心情的には供奉を楽しみに変えて保存伝承している」

江差では、祭礼が当初は大手商人を中心として執行されてきたのであるが、その後、地域住民を主体としたものに移行し、民衆化して楽しむ祭として展開・発展・継続してきたのである。

一方、箱館八幡宮は松前藩の保護・育成のもとに運営され、祭礼も強制力で以て押し進められてきた。また、神主も国家権力と結びつきながら神社勢力を拡大させる指向であった。そして、住民が祭

礼において主体になることがなかった。ここにも箱館の祭礼が消滅する要因があったのではなからうか。

注

- (1) 「社記伝記控」にはこれが書かれた年月の記載はないが、本文中に「再建正保元年、当文政五年迄凡百七十八年也」の記述があるところから記載年がわかる。
- (2) 「江差町史」資料編第三巻に所収。
- (3) 「江差町史」資料編には、この「社記伝記控」の他に「神社之起原」が収録されており、それには「社地替安永三年当所岡山之麓、今之宮処へ移しける」とあり、頭注に「其後人家次第と建込み侍候。穢有之ニ付、此岩崎本岡山之麓ヲ避奉、故ニ姥神町と名付」と記されている。
- 岩崎岳と岡山は同所であるので、「社地替」とあるは、姥神町の中で社殿を移動させたことを意味するのではなからうか。
- (4) 「江差町史」資料編第三巻に所収。
- (5) 「元治元年子八月両社御祭礼行列並宿割控」(『江差町史』第六巻通説二に所収)
- (6) 「明治十年丑第十月日山々立場順列控」(『江差町史』資料編第三巻に所収)
- (7) 「函館市史」史料編第一巻に所収。
- (8) 文面は「寛政中辺防議起、安論奉「台命」巡行、及「後置」「鎮于箱館」、安論与「羽太正養」拜「其職」、箱館旧有「八幡宮」、今從「地尊理、謹以」弓矢一副「献」之神前、上以祈「国家無疆」、下以禱「北陸安寧」、伏望



神慈監納、文化二年五月五日筑前守従五位下藤原朝臣安論敬白」

(9) 『函館市史』史料編第二巻に所収。

(10) 市立函館図書館所蔵

(11) 高原美忠編・発行『函館八幡宮史話』（市立函館図書館所蔵）

(12) 『国幣中社函館八幡宮紀要』・『函館八幡宮史話』

(13) 市立函館博物館所蔵。幅二二・五センチ、長さ一一・五メートルの彩色絵巻。

(14)・(15) 『函館市史』史料編第一巻に所収。

(16) 一八四三年三月パリで創刊され、一九四四年に廃刊された絵入りの週刊紙。（横浜開港資料館編集発行『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一巻に所収）

(17) 『函館市史』史料編第一巻に所収。

(18) 仏文の記事は、中日本自動車短期大学教務技術職員藤田英樹氏の邦訳によった。

(19) この記事に続いて、記者は次のようにまとめを書いている。

「(祭礼の)三日間は最も激しい興奮と無駄遣いと乱痴気騒ぎのうちに過ぎた」が「鎮圧するにふさわしい混乱は全く無かった」それは、「日本では相互の礼儀があらゆる階級の子供の教育の最も本質的な点の一つであるということに原因がある」とし、「酒自体この日本人達の陽気さを失わせることはできず、この陽気さこそ彼らの性格のうちで最もきわだった点」であり「もし人々がかくも不条理で専制的な政治の中に日本人をとどまらせている鎖を断ち切ることができたら、そこに素晴らしい可能性が見いだせるだろう」「この知的で真面目で活発で働き者でときばきとした国民が、自分達を繋ぐ鎖の重みを感じるようになったら」「外国人と交流をもつことによって考えることを学んだら」「最も厚

い闇の中にとどまってこそ存続しえている現在のシステムは、もう駄目になるだろう。すでに幾筋かの光はその闇を貫いている」と、日本の封建支配体制の崩壊を予知している。

(20) 住吉大神とは、底筒男命・中筒男命・表筒男命の三柱の総称で、『日本書紀』によれば新羅へ向かう神功皇后にこの三柱が神託を下し、渡海を守護したとされる。そして、江差や箱館の曳山に神功皇后の人形が備え付けられるのもこれに関連している。

### 参 考 文 献

『江差町史』資料編三・通説一・二 一九七九・八二・八三年

宮良高弘編『江差の社会と民俗』江差町発行 一九九二年

宮下正司著・発行『江差風土記』一九九一年

『函館市史』史料編一・二・通説編一 一九七四・七五・八〇年

『国幣中社函館八幡宮紀要』函館八幡宮社務所発行 一九二二年

高原美忠編・発行『函館八幡宮史話』一九三五年

横浜開港資料館編・発行『「イリュストラシオン」日本関係記事集』一九八六年

田中泰彦編『京名所図絵と祇園山鉾』岩崎美術社発行 一九九〇年

本稿作成にあたり、江差町史編纂委員会の宮下正司氏・函館博物館の岡田一彦氏・中日本自動車短期大学の藤田英樹氏の三氏には、特にお世話になった。

ここに記して、深く感謝申し上げる次第である。